MGC　バルト三国 演奏旅行　～オプショナルツアー～

ノルウェーのフィヨルド観光　（2018.9.21～24）

1　ベルゲンへ

９月２１日　ヘルシンキでの昼食後、他のグループと別れて、フィヨルド観光組 11 名（石林ご夫妻・佐野さん・角田ご夫妻・池田さん・大畑ご夫妻・松田ご夫妻・平野）はヘルシンキ空港からノルウェーのベルゲンへ。ベルゲン空港には予定通り 16 時過ぎ（ベルゲン時間）に到着したが、空港ターンテーブルでスーツケースをピックアップする段になって、事件は発生した。

石林夫人と池田さんのスーツケースが、待てど暮らせど現れない。係員から「荷物はもう終わり」と言われたとかで、結局未着。係員から、クレームはクレーム係に行けと言われ、池田さんは単身、空港内を客待ちスペース等を経由してそれらしい窓口へ、かなりの人たちが並んでいる列に加わった。そのタイミングで、待ち合わせていた日本人ガイドと合流でき、そのあとは彼女の援助で現況把握ができた。
が、それは二人のスーツケースの行方は判らない、ということであった。やむなく荷物のタグ番号やスーツケースの形や色などと、見つかった場合は、オスロのホテルへ届けるよう連絡先を告げたのみで終わった。

ここからの三日間は、お二人にとっては何かにつけて不自由で心の重い旅だったのではないかとお察しする次第である。

想定外の事件のため、ホテルへの出発がかなり遅くなり、ベルゲン市内のミニ観光はほぼ省略となったが、一ヵ所、港越しにブリッケンの建物群を眺めることができた。ここはハンザ同盟で有名なところで、世界遺産に登録されており、各々薄暮・小雨の中、盛んにシャッターをきった。

ホテル到着のころには天候悪化し猛烈な風雨だったが、お二人の当面の身の回り品の調達のため、ガイドさんの案内で近くのスーパーへ。最低必要品は何とか調達（？）したものの、傘の骨が折れるほどの荒天のため、ほうほうの態で引き上げ、夕食はホテルのビュッヘで済まさざるを得なかった。

2　フィヨルド観光

翌 22 日は昨夜の悪天候も収まり小雨もようではあったが静かな朝、 7時 30 分過ぎにホテルを出発。大型観光バスに 11 名の贅沢なツアーである。

昨夜、空港でひと働きしていただいたガイドさんは、オスロ在住うん十年とかで、お名前は Momo さん。漢字は「白」と書き「モモ」と読む、本名だそうである。（姓は明かされず、熊本県出身とのこと）　現地でも呼びやすいことから、Momo,Momo と呼ばれているようである。

その Momo さんのガイドでベルゲン市内を抜け、ヨーロッパ高速道 E16 号を北東に走ること約９０分、ヴォスの街で休憩を取る。この町は交通の要所らしくひらけた感じであった。

休憩後さらに北上すること一時間余り、途中水量豊富な滝など観光しながら、グドヴァンゲンに到着、ベルゲンから北東方向へ１５０Km 内陸に入った町である。ここから、いよいよ観光船でのフィヨルドクルーズである。

このフィヨルド＝ソグネフィヨルドは、ノルウェーにある 5 つのフィヨルドの中で代表的なもので、その規模は長さ約２００ｋｍで欧州一を誇るものといわれ、いくつもの支流に分かれている。

我々は、その支流の１つ、ネーロフィヨルドをグドヴァンゲンからフロムまでの約 2 時間のクルーズを楽しんだ。このグドヴァンゲンというところはベルゲンから北東へ約１５０ｋｍ内陸に入った所で道中も山の中を走って、この急傾斜の山に囲まれた船着き場に来たわけだが、なんとこの船着き場が海抜ゼロメートル、水はしょっぱいという。言われてみれば、フィヨルドというのは、海とつながっている峡谷、ここは、遠く離れたノルウェー海とつながっている海だったのだ。認識を新たにした次第。

観光船は、この穏やかな海面をほとんど揺れることなく大峡谷を進む。左右の屹立した急斜面の岩壁は、所によっては高さ１０００m あると言われ、そこに大小の滝がつぎつぎと現れる。これが何キロもつづき、見事な景観だった。

中に、岩壁の最上部から大量の水が勢い良く流れ落ち、途中の岩で水煙を上げ、落差６００mを 4 段に分かれて落ちる大滝が目を引いたが、これは東山魁夷も描いたという「ザークの滝」とのこと。

（東山魁夷は北欧を旅して、心の故郷に巡り合ったなどと書いているそうである）

クルーズ後半、峡谷が大きく右にカーブしてフロムに向かう辺りでチラと陽光が差し、今まわり込んできた峡谷を跨いで虹の橋が架かった！　これには皆大感激。我々のクルーズを歓送してくれていたようであった。

フロムはフィヨルド観光の中心地、ここで昼食・ショッピングを楽しみ、ここからはフロム山岳鉄道で山登り、途中、妖精が現れるというシュスの滝を見物して、８６７mのミュルダールへ向かう。ミュルダールはベルゲン～オスロを結ぶベルゲン鉄道の中間点にあり、ここでこの鉄道に乗り換えて今朝通ったヴォスに戻る。

ここから再びバスに乗り約一時間で山を下り、今宵の宿泊地ウルヴィークに着く。ここのホテルはハルダンゲンフィヨルド（ノルウェーではソグネフィヨルドに次ぐ２番目に大きなフィヨルドとのこと）の最奥にあり、海抜０ｍではあるが山奥の湖畔の宿の趣であった。きれいで感じの良いホテル、ここのレストランホールの入口に掲げられいた名称が「PEER GYNT」とあり、ここノルウェーは、大作曲家グリークの国だったことを気付かせる一コマだった。

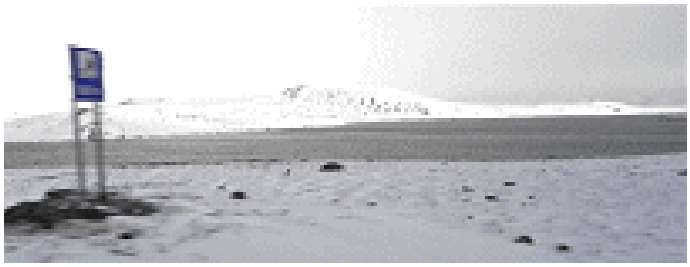
３　高地・ハルダンゲルヴィッダ台地

翌朝は、鈴なりのリンゴの木やバラの花などが咲く、明るい水辺の庭で全員の姿をカメラに収めて出発。しばしフィヨルドに沿って走り、ハルダンゲル大橋で対岸に渡る。この橋は１３８０ｍあり、ノルウェー最長の吊り橋とのこと。ここでフィヨルドとは別れ、ハルダンゲルヴィッタ台地へとバスは登る。ループトンネルを出ると景観は一変、

枯れた白樺が枯草原に点在する初冬の景色が拡がる。登り着いたのがヴォーリンクの滝の展望台で、ここは標高約１０００ｍ、気温は３度とか、小雨もよいで厳しい寒さだった。この展望台は滝を正面から見るのではなく、落差約１３０ｍの滝の落ち口を上からの覗き見るスタイル、それも相当の水量の流れが左右２方向から止めどもなく勢い良く水煙を上げて落ちてゆく。

滝壺は遥か下で見えず、文字通り足がすくむ展望台であった。寒さから逃げるようにバスに戻り、一息つく。

ここからのハルダンゲルヴィッダ台地は標高１０００m以上の湿地帯が続き、あちこちに湖沼が点在する草原で周辺は山並みのゆるやかな稜線が眺められた。この高地は、鹿の狩猟やトレッキングを楽しむ人も多くそのための小屋などの設備も見受けられた。また、青く光る氷河も見えるそうだが、この日は積雪で白い山だった。高原台地は徐々に高度を下げ、車窓は雪景色の白から牧草地などの緑に変わってきたところで小綺麗な集落で昼食休憩。天気も良くなり、例によってビールなど飲み物と肉料理などを味わう。さらに車窓から大きな湖の景色などを楽しみながら、約３７０ｋｍ・8 時間の旅で１７時ごろオスロに到着した。

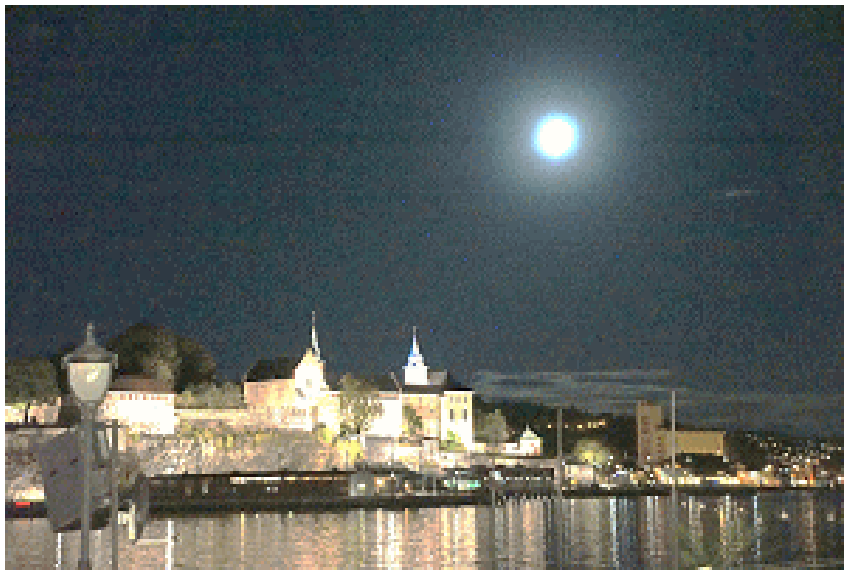


4　オスロ

ホテルチェックイン後、早速徒歩で市内観光へ。まず、近くのオペラハウスを見物する。10 年ほど前にオープンしたという白大理石の斬新なデザインの建物。海辺にあり、夕日に輝く白い姿は眩しかった。　公園を隔てて隣接するオスロ中央駅から王宮まで西に伸びる目抜き通り（カールヨハン通り）をそぞろ歩く。

レンガ造りの大聖堂や商店、レストランなどが混然と立ち並ぶ通りを王宮に近づいた辺りで、横手の道路から一騎の騎馬警官が突然現れ我々の前を悠然と通り抜けた。一瞬、馬上の女性騎乗兵が微笑んで見えたのは、思い過ごしだったか・・・　今でも王宮の周辺を巡視しているのだろうか。

国会議事堂の前から、ノーベル平和賞の授与式が行われるという市庁舎の横を抜けてオスロ港の広場に出る。係留されている船のマストのシルエットが夕映えの中、印象的であった。港の西側に軒を連ねるレストラン街で二手に分かれてディナータイムを楽しむ。食後店を出ると、港の明かりの上にまーるい満月が輝いているではないか　！



ツアー最後の夜は、月明かりの中皆さんご機嫌でホテル戻った。

5　スーツケース

一縷の望みをもってホテルに戻ったが、スーツケースは届いておらず、行方不明のままだった。

実は、21 日以降、ガイドの Momo さんがフィンエアなどに連絡をとっていたのだが、土曜日・日曜日ということで連絡が取れなかったり、取れても「所在不明」という情報ばかり。土曜日・日曜日でもお客は航空機に乗り動いているのに「土日はダメ」というのはどういうことかと、思ったりしたのだが。

23 日オスロ到着後、角田さんの提案で既に帰国してるツアコンの河村さんにも連絡を取ったりもした。

翌 24 日は、空港での行動時間を確保するべく 1 時間

早めて 9 時 30 分にホテルを出発、オスロ空港では Momo さんの先導でクレーム係へ。ここで、漸く「荷物はヘルシンキ空港に留め置かれている」ことが判明。

理由は、スーツケースの中にバッテリーチャージャーとバッテリーが入っていたこと。最近韓国サムスン製のバッテリーの発火事故があったため、バッテリー類は手持ちでなければパスしないという。

　スーツケースのあり場所が判り一安心したが、新たな心配が浮上する。

ヘルシンキ空港でのトランジット時間が、アジア方面へのフライトが集中のため、タイトなこと、スーツケースの引き取りとその後の諸手続きで帰国フライトに間に合うかどうか、である。

　ヘルシンキへの機中でキャビンアテンダントからの「空港でフィンエアの日本人スタッフが待っている。その指示に従うように」との話の通り、着陸して空港建物に入る所で彼女は、「Mr＆Mrs IKEDA」のプラカードを掲げて待っていてくれた。（いつの間にやら、池田さんは石林夫人と夫婦になっていた？）お陰で、その後の手続きは順調に進めることができた。バッテリーの取り出し・取り出した後のスーツケースの再チェック・出入国の手続き・搭乗のためのスーツケースの預け・機械式のチェックイン、と一連の手続きを行い、皆と合流できたのはギリギリ搭乗開始 5 分前だった。

　時間的にも精神的にもキツかっただろうけれど、何とかフライト時間に間に合い、皆と一緒にそしてスーツケースとも一緒に無事帰国できました。まずは、めでたし、めでたし。

池田さんのつぶやき

　ヘルシンキ空港で全ての手続きを終えて、トランジット場所に急ぐ途中で、ツアコンの河村さんに勧められていた「コスケンコルヴァ」というウオッカが売店にあったので、手に取ってキャッシャーに行くも、沢山の人が並んでいて、誠に残念ながら諦めざるを得なかった。　帰国後、ネットで調べたら、日本では販売していないことが判明。重ねて、悔しい思いをさせられた。残念、残念　！！

6　おわりに

　今回の旅の前半のバルト三国は、文字通り平原の国、農業と牧畜の国、その国々をバスで７日間移動する旅でした。これに対して、ノルウェーのベルゲンからオスロへは、海あり断崖や山あり、滝や湖あり、雪あり緑ありで、大変変化に富んでおりました。交通手段もバス、鉄道、さらにクルーズ船と色々。文字通り対照的な地形の変化の妙を楽しむことのできた旅でした。参加できて感謝です。

2018.10.31　　平野　真